
ジショウ

仲鈍要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジショウ

【Nコード】

N1266R

【作者名】

仲鈍要

【あらすじ】

恋愛などさらさら書く気のない作者の描く恋愛物語。

あらすじ？とらあえず、脇役的ポジションの人が頑張って好きな女の子を攻略しようとする話。・・・予定

ブログでいいのか？（前書き）

友人が作品アップしたから俺もアップしてみよう。と思い投稿した。

駄文でありきたりな設定だと思う。許して。
ジャンル恋愛にしてなかったorz

ブローグでいいのか？

世の中には大きく分けて2種類の人間がいる。

――成功が運命により決められている、いわゆる主役になれる奴とどんなに足掻いたところで成功者には決して叶わず凡人ではない、いわゆる脇役というやつだ。

俺は純粹に成功できると信じ足掻いていただけの滑稽な操り人形。

これはそんな俺の滑稽な物語。

暗く惨めな負け犬の遠吠え。

身の程も知らずに主役になれると意気込んでいた、哀れなピエロ。

主役になりたいと思いつながらもどこかで諦めていた馬鹿な道化師。

主役に嫉妬しながらも主役のあいつと笑いあっていた無機質な仮面。

そのすべてが俺を追い込む。

好きだったあいつの照れたような顔が俺の心に突き刺さる。

ずっと親友だと思っていたあいつの照れながらもどこか嬉しそうな顔が俺の心を荒立てる。

結局は俺がすべて諦めれば楽になる。

今までだったそうしてきた。自分の想いを外に出さずただ周りに流されるように生きていた。

流れに逆らったところで何も変わらないから。

あいつは俺のほしかったものを持っていた。

あいつは生まれつきの主役だった。

俺はただ生まれつきのわき役だった。

たった、それだけのことだった。

0・5話（前書き）

ああ、友人が投稿し始めたからおれもやってみた。
反省はしている。だが後悔はしていない。

駄文でつまらないものですがよろしく願います

0・5話

俺の名前は久遠寺^{クオンジ} 永夜^{エイヤ} 水鷺学園に通う学生だ。
自分のことを一言で表すというのなら 調子に乗らせていただいて、
自称主人公の親友だ。

俺は今とある女友達と一緒にファミレスにいる。
別に彼女でも何でもない、ただの女友達だ。

「ねえ、クオン、どうやってユキを誘えばいいかな？」

目の前の少女、宮上 刹那（ミヤガミ セツナ）は少し困ったようだけれどもその場面を想像し照れたような顔で俺に尋ねてくる。
普段は男勝りでさっぱりと性格の彼女のそんな一面を見て嬉しくも思うと同時にずきりと俺の心が痛む。

「刹那ちゃんは普段通りで会話の中で何げなく誘ってみればいいんじゃない。例えば今度の日曜日一緒に二人で出掛けない？とかそんな感じで」

俺がそう言っていると彼女はその場面を想像したのだろう。

ボンと音を立てて顔を真っ赤に染める

「ムリムリムリムリ、そんなんじゃないかもと変わらないじゃん。だから、その、さ・・・」

そういつて刹那は顔を赤らめたまま黙ってしまふ。

「ユキの周りには最近可愛い子が集まってきたよね、本当にうらやましいな。」

そう言っていると刹那は俺に対してキツと睨みつけてきた。

「ごめんごめん、それを意識して、ここはひとつ私だって女なんだってことをアピールしようとか。」

刹那の相談の意図を察しあえて意地悪く笑いながら口に出して言う。
「ちよ、そんなことないんだから！！、ユキの周りの女の子は関係

なくて・・・」

最初は勢いよく否定しようとしたが後のほうでだんだんと尻つばみになってしまう。

「クク」

そんな彼女を見て俺はほほえましく思いつい声に出して笑ってしま
う、

「笑うな、あたしは真剣なんだから！！！」

顔が照れて真っ赤な状態で怒られても全く怖くない。むしろほほえ
ましく感じる。

「クク、ごめんごめん。じゃあお詫びとして2人のデートをとりつ
けて上げるからそれで許してよ。」

俺はその怒りを鎮めさせるために笑いをこらえながらも、デートを
取り付けさせるあげようにいる。

「デートじゃないから！別にユキと、デート、したいわけじゃ・・・」

「

怒っている刹那もデートと言う単語に反応し急におとなしくなる。

そんな急におとなしくなった姿も見て俺は少しいじりすぎたかな？
と反省する。

「あ、俺はドリンクお代わりしてくるけど一緒について来ようか？」

俺は唐突に話題を変える。

「あ、うん。じゃあ私はメロンソーダで」

「りょーかい。ちょっと待っててね」

席を立ち、軽く手を振りながら、ドリンクバーへと向かう。

「うーんと、俺は何にしようかな。ミルクティーでいいか。えと、
確か刹那ちゃんはメロンソーダだったな。」

そう言つて、ドリンクバーのメロンソーダのボタンを押し少し待つ。

「少しは時間が立ったし刹那ちゃん少しは落ち着いてるといいけどな
必死にデートと言う単語を否定しようとしている刹那の顔が浮かび、
つい笑いそうになってしまふ。」

俺は両手にミルクティーとメロンソーダの入ったコップをもち、自分の座っていた席へと戻る。

「ほい、お待たせ」

俺は刹那にメロンソーダの入ったコップを渡す。

「刹那ちゃんは今度の日曜日ってあいてる？」

席に座るなり俺はいきなりそう尋ねる。

「え？まあ、うん」

おそらく俺が何か用事でも頼むかに何かすると思ったんだろう。返事が少しはつきりしない。

「じゃあ、刹那ちゃんの幸卓のデートは今度の日曜日でいいな。手配しておくよ。」

「ブッ！！、ゲホツゲホツ。ク、クオン、何いきなり言い出すのよ。別にデートなんかじゃないって！！」

メロンドーダを少し噴き出して、デートと言う単語をまた強く否定する。

今度はしつかりと否定したよ。しかし、せっかく向こうのほうからからかうネタを提供してくれたのだから俺はからかうことにする。

「そうなんだ、別にデートじゃないんだったらとあるツテからもらったこの遊園地のフリーパス券いらないよね。」

俺は意地の悪い笑みを浮かべて、遊園地のフローパス券をちらつかせる。

どこから手に入れたか？とあるツテだ。

「別にデートじゃないんだったら、普通に誘えばいいだけだから何も俺に聞く必要ないよね。」

さらに追い打ちをかける。

「うう・・・」

刹那は何も言い返せずにただ唸るだけだ。さらに俺は追い打ちをかける。

「じゃあ俺はもう必要ないみたいだから帰るよ。代金は払っておくからあまり店の人に迷惑かからないうちに出てきてね!。」

そう言つて席を立とうとする。

「お願い、します。」

刹那は小さい声でそう言つた。

「えッ?何聞こえない?それに何を?」

何と言つたのかはわかるのだが、しっかりと聞こえないためもう一度言ってもらふ。

俺の口元は笑いを隠し切れていない。

「ううう・・・」

自分自身で幸卓とデートと言つのはプライドが許さないのか恥ずかしいのか唸つてばかりだ。

「なにも用ないなら行くよ?」

「おねがい・・・します。」

少し小さかつたけど、聞こえたのでよしとしよう。

「分かつた、分かつた。そんな目で見ないで」

すこし潤んだような目で見られては良心が痛むというもの。

おまけに初恋の相手だ。それに勝てるわけがない。

「じゃあ今度の日曜でいい?どうせ幸卓は自宅で何もしていないだろうし、刹那ちゃんの都合が悪ければ帰るけど?」

そういうと急に刹那は笑顔になる。

本当にずるいと思う。結局は惚れた弱みなのだが、俺は好きな女の子の恋を応援しなければならいなんて。

もちろん俺は刹那に告白なんてしていない。

勇気がないのかもしれない。告白すれば何かが変わるかもしれない。けど断られた時が怖くて告白できなかった。

日曜日で言い問う返事を刹那から聞き、俺は会計を済ませるため力ウンターへと向かう。

「お会計、1564円になりなす。」

「2000円をお願いします。」

「2000円お預かりいたします。お釣り436円でございます。」
レシートとお釣りを店員から受け取り、刹那とともに店を出る。

「今日はありがと、相談に乗ってくれて、それじゃ、日曜日のことよろしくね〜。じゃ、また明日ー」

店から出ると刹那は店内の時とは違ういつもの調子に戻っていた。俺に笑顔でそう言つと、あつという間にどこかに行ってしまった。その笑顔につられて俺もつい笑顔になってしまう。

そんな明るさが彼女の魅力で俺が彼女に魅かれたところだった。

「気をつけて帰れよー」

だんだんと小さくなっていくその背中を見送り俺も歩き出す。彼女の走って行った方向を見るとおそらくそのまま自分の家へと帰るのだろう。

俺は家の方向が同じで結構近所だが寄りたところがあるため、違う方向へと歩き出す。

本来なら家まで送って好感度を少しでも上げたいところなのだが、断られてしまった。

元々俺に気持ちがいはいないで、俺の親友幸卓に向いているのが好感度もくそもないのだが、それでも男として送ろうといったんだ。

さすがに数ヶ月間程度の付き合いではないので警戒されているというわけではないので余計にショックだ。

少し喰らいつつこつとも思ったのだが、あまりしつこくしてもうざったいだけなので諦めたのだ。

「さて、俺はどうするか」

刹那の背中が完全に見えなくなった後、はどうするか考え適当に街をぶらぶらすることにした。

「振られ男はふられ男らしく、適当に気分転換しますか・・・つと食材切らしてたな。買い物していくか。ハアツ独り身はつらいな。」愚痴をこぼしながら、俺は進路を少し変え、スーパーと向かっていく。

スーパーで買い物をしてから家に帰る。

「ただいまー」

俺の声が無人の家にこだまする。

「ハアツ」

別に俺は一人暮らしというわけではない。実質的には一人暮らしだが、父さんと2人で暮らしている。

母さんはたぶん、今幸せにどこかで暮らしているのだろう。

母さんと父さんは俺が小学生の時に離婚した。原因は母さんの浮気。離婚して以来父さんは仕事にのめり込むようになった。といっても元々仕事人間だったのが余計にひどくなったただけだ。

たぶん母さんのことを忘れたかったんだと思う。母さんが浮気した原因の一つに父さんの仕事人間ぶりの性も含まれていたのかもしれないが今では知る由もない。

仕事人間で元々家庭をあまり顧みなくなった父さんは離婚して以来全く家庭を顧みなくなった。ほとんどの日を会社で寝泊まりしているほどだ。

たぶん、家にいたくないのだろう。母さんとの思い出が詰まっている家にいるのもつらいし、2人の愛の結晶である俺を見るのもつらいのだろう。

そのおかげで俺は小学生のころから家事を覚える羽目になった。いまでは役についているのだが、小学生のころはみんなと遊ぶ時間がなくて珍しく帰ってきた父に一回ごねたことがあったのだが何も変わ

らなかった。

それ以来俺は父さんに文句を言うことは無くなった。いや、話すことすらなくなった。

それが今の俺の家庭の現状。それでも俺は父さんと母さんを恨んではいない。いや、何も思つてすらいない。

ただ、今まで育ててくれたこと、学費を払ってくれていることなどは父さんには感謝しているがそれだけだ。それ以外はほとんど他人同然だ。

俺にスーパーで買った荷物を下ろし、息を吐いて、そのまま立ちつくす。

「ホントに辛いよな、好きだった子の恋を応援しないといけないんだ。どんなに笑顔を向けてくれていてもそれはおれじゃなくて幸卓を見ているってことだからな。」

ああ、そうだ、夕飯の仕度しなきゃ。」

再びスーパーで買った荷物を持ちのそのそと台所へと向かう。

台所について野菜や肉を冷蔵庫に入れてから料理の準備をする。

小学生のころからやっている料理だが、あまりうまいとは言えない。まずいということはないが美味いと唸らせるような腕があるわけでもない。

「腹減ったし、適当に作るか。」

鬱な自分の気持ちを鼓舞し、調理に取り掛かる。

「いただきます」

料理を終え一人で食事をする。

「・・・」

一人きりテレビもつけず、無言の食事

「御馳様」

早々に食事を終え、食器を洗い自分の部屋に行く。

バフッ

部屋に入るなり俺はベットに倒れ込む。

「ああ、土曜は晴れたらたまった洗濯物しないと。最近忙しくてぜんぜんできなかったからな。」

ベットに倒れ込み睡魔が襲ってくる。今日はもう疲れた。このまま眠ってしまいたい。

「寝る前にシャワー浴びなきゃ、浴びなくてもせめて着替えないと」そう呟くも、襲い来る睡魔に勝てず眠ってしまう。

「ああ、本当に疲れた、なんで俺はこんなに疲れたんだろう・・・。なんで、こんなに、疲れてだろうな。」

0・5話（後書き）

うん、まじめな話を書こうと思っているんだ。

1話 日常（前書き）

話がなかなか思いつかないな。
つまらなく、駄文ですが読んでくださるとうれしいです。

1話 日常

ピピピピ ピピピピ

「ん、もう朝か。起きないとな」

目覚まし時計のアラームに起され、寝起きのけだるい感覚に抗いながらのそのそと立ち上がる。

時計を見る針はいつも通り俺が起きる時間を指していた。

「朝飯作らないとな」

本当はもつと寝ていたいのだがここで誘惑に負けてしまつと朝食が抜きになってしまうので眠い体に喝をいれ起き上がる。

「さて、朝食作るか」

台所に立ち、朝食の準備を始める。

トントントントン

包丁の刻む音が心地よいリズムを刻む。

「いただきます。」

みそ汁などの朝の定番メニューを作り終え、早速食べる。

「うん、今日も普通だ。可もなく不可もなくだ。」

自分の作った料理の感想を一言だけいい後は終始無言で食べ続ける。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ごちそうさま」

一人きりの食事を終え食器を流しに持っていき洗う。

「そっぴや、最近一人でしか飯食ってないな。父さんも最近ぜんぜん帰ってきてないしひょっとして女でも出来たのかな?」

あの仕事人間もついに仕事人間じゃなくなるかもなと想像するもその様子が思い浮かばなかった。

「あの人はやっぱり仕事しかしていないイメージしかないな。さて、そろそろ時間だし、学校に行く準備するか。」

食器を洗い終わった俺は制服に着替え、鞆を持ち、玄関へと向かう。

「いつてきます」
誰も見送ってくれる人などいないとわかりながらもつい言ってしまう。

家から出ていつも通りの道をいつも通りの速度で歩く。

家から水鷺学園まで大体徒歩で20分くらいだ。自転車で通ってもいいのだが、俺は徒歩で通っている。

「ん、そろそろあいつらが見えるころだと思っただがな・・・ちよ
うだったな」

俺は少し遠くを見るようにして前方にいる3つの人影を見つめる。
男1女2の割合だ

「ああ、あそこ入りづらいな。このままの距離でいようかな。」

そう思いつつも足は自然と速度を上げ前に進んでいく。

俺はその人影の中の唯一の男に声をかける

「よーす、幸卓ー」

「おはよう久遠。」

「刹那ちゃんも、ニアちゃんもおはよー」

「おはよ、クオン」

「おはようございます。永夜さん」

続けて女の子たちのも声をかける。

さて、俺はいつもあっているこいつらだが改めて一旦こいつらを紹
介しようか。

まずは最初に俺が声をかけたのが村井 ムライ 幸卓 コキタカ 俺の親友でいわゆる
主役なやつだ。

といっても別段特別に勉強ができてスポーツもできるというわけ
はない。両方とも平均より上ってくらいだ。ついでになかなか正義
感も強い。

なかなかのイケメンだがあまり女子に告白されているところを見かけたことがない。

といってもちゃんと理由がある。

これだけなら主役とは思えないのだが、お隣さんにかわいい幼馴染、お兄ちゃん子な血のつながらない妹。その他もろもろがあつて俺はこいつを影で主役と呼んでいる。

こいつの周りにいる少女はほぼ全員美少女なため女子からは告白されることはない。

部活には所属していない。

次に宮上 ミヤガミ セツナ 刹那俺の初恋の相手。告白する前よりも以前に玉砕しているが。

典型的な幼馴染属性を持ち、よく幸卓の世話を焼きたがる。まあ、これは幸卓に好意を持っているからだ。たぶん。

スポーツ万能、頭脳明晰、おまけにスタイルも抜群で顔もかなり可愛い。おまけによく気がつき、優しい子だ。

ただ恋愛に対しては奥手。所属している部活はテニス部で、後輩からは尊敬の的で先輩からの評価も高い。

幸卓と刹那は小学校以来の付き合いだ。髪は黒のポニーテールで身長は157？ スリーサイズは うわっ何をするヤメッウワアアアアアアアアアアア

最後に村井 ニアちゃん 幸卓の血のつながらない義妹。性格は内気でよく幸卓の背中に隠れていることが多い。もちろんの如く可愛い。

学年は俺らよりも1つ下だ。

この子はスポーツは………な結果だが頭はなかなか良い。気を許した相手には破壊力満点な笑顔を見せてくれる。

所属部活は家庭部で料理が得意らしい、今度食べてみたいが、たぶん食べさせてくれないだろう。

もちろん前述の通りかなりのお兄ちゃん子だ。人前では我慢しているようだがそれを知っている人の前だと普通に幸卓にひつつく。髪は雪のように白く、ロングストレート。スリーサイズは えっ何その光る包丁？ちよっ嘘だよね？命だけはああああ！！とりあえず体の起伏があまりない一部の大きいお友達受けするだけ言っておこう。

これが水鷺学園に入るまでのフルメンバーだ。

「刹那ちゃんもニアちゃんも夏服可愛いねー似合ってるよ」
俺はその集団に入り込むために無難な会話から入る。

「ん、ありがと」

「あはは、ありがとうございます」

む、あまり喜んでもらえなかった。仕方ない

「そう思うだろ？幸卓」

幸卓に振ることにした。

「ん、ああ」

突然話を振られ戸惑いながら返し幸卓は2人を観察する。

「どお、ユキ？」

「どうですか、兄さん？」

少しほほを赤らめながら2人は幸卓に聞く

「うん。似合ってる可愛いよ」

「ホントー!!」

「ほんとですか兄さん!!ありがと」

幸卓がそう答えると2人は喜びはねる。

「俺の時とずいぶん違うわい？」

少し泣きそうになりながらも尋ねる。

「だってユキだもん（兄さんですもん）」

「ヒドッ!?ちよつと俺の扱いひどくない!?!?そう思っつしょ。」

幸卓？」

「久遠なら仕方ないだろ」

「さらにヒドッ！?!？」

幸卓の言葉にさらにへこんだ。

その俺のリアクションに3人は笑う。

俺もそれにつられながら次の話を振る。立ち直りの速さは天下一品と自負している。

「そついや幸卓今度の休みあいてる？」

「スマンが惰眠をむさぼるのに忙しいほかを当たってくれ」

俺が休みを尋ねるのは大体が何かを頼む時だ。それを察知してか断られる。

惰眠がいいわけって何だよ。

「いや、今回は別に用頼むわけじゃねえよ」

「じゃあなんだよ？」

「とあるツテから遊園地のフリーパス2枚いただいたんだが俺は一緒に行く相手がいないのでな。」

「それを俺にくれるのか？」

俺の言葉から幸卓は先を読み、答えを言う。

「その通りさ、つーわけで刹那ちゃんでも誘って今度の日曜いってくれば？有効期限だつてあるか使わないのももったいないし」

俺はそういつて刹那の方を向く。

「日曜あいてるっしょ？刹那ちゃん」

これはすでに昨日確認済みだから返事は分かっている。

「空いてるわよ」

予想通り、というかここで裏切られても俺は困らんが困るのは刹那だけだ。予想どおりじゃないと困るだろ。

「だつてどうする？」

再び幸卓のほうを向き直り、聞く。

「まあ、いいんじゃない。」

幸卓はそう返事を返す。

よし、これでまあ約束は果たせたかと思っただのもつかの間
「むゝ、永夜さん私には何もないんですか？」

今度はニアちゃんが言いだした。

おそらく幸卓とどこかに行きたいのだろう。だが俺は

「えっ俺と行きた」

「あはは、遠慮しておきます」

俺の言葉をさえぎりにこやかな笑みで断りを入れられる。無謀な挑戦だった。結果は分かり切っている勝負に挑み見事に玉砕した。

「あゝ、じゃあ今度何か手に入ったら上げるよ。たぶん2枚しか手に入らないだろうから幸卓といってくるといいよ」

俺はまだ手に入れていない何かもわからぬチケットを渡す約束をニアちゃんとする。

「いつも、刹那ちゃんとニアちゃんにはお世話になってるだから遊んでやれよ、幸卓」

「何だニア？どこかに遊びに行きたいのか。それなら刹那と一緒に俺の代わりに遊園地に行ってくるか」

幸卓は全く場の空気を読めない発言をしてくれる。

（マジでこいつ空気読めよ）

流石の俺もちよつとイラッとした

（仕方がない。もはやここまで言っただけやるしかないとはな）

「おいおい幸卓、女の子にお金使わせるつもりか？ここは1日ぐらいおごってやるとかそれくらいの度量を見せろよ」

俺は幸卓にそうして女の子二人組のほうを見る。

もちろん二人は期待に満ちた目をしている。

「はあっわかったよ。じゃあ今週の日曜日でもいいな。」

今月もう金が少ないのに、と2人には聞こえないようにボヤク。

2人の期待に満ちた視線に負けて幸卓は折れる。

（最初彼余計な手間かけさせず折れろっつーの。俺の気持ちも知らないで）

渋々折れた様子の幸卓に心の中で悪態をつく。

「金は貸さんからな」

むかついたのでピンチだと聞こえてきたサイフ面での援助をあらかじめ断っておく。

「大丈夫ですよ、私が貸してあげますから」

すぐに妹から救いの手が伸びた。

「いや、いいよ。自分で何とかするから。さすがに妹から借りると兄としての威厳がなくなる。」

そういつて幸卓は断る。

「オーケー、つまりおれに学校中のやつらに根回しして幸卓には金を貸さないようにすればいいのだな。」

（オーケー、つまりおれに学校中のやつらに根回しして幸卓には金を貸さないようにすればいいのだな。）

おつとつい心で思っていたことを口に出してしまった。

俺は人脈はやたらと広い。遊園地のフリーパスだってその人脈からのものだ。

「「何言ってるの（ですか）！？」」」

3人から同じ突っ込みを受けた。

「流石に全員は無理かもしれないが同じ学年のやつらにはできるぞ？」

「いや、クオンは色々な人と話しているところは見たことあるけどそこまでいつてたなんて・・・」

と若干引きながら刹那が言う。

「永夜さん、そんなことできるんですか！?!？」

と驚くニアちゃん。

「相変わらずお前は何をやってるんだ。」

と呆れる幸卓。

「いいのか？金が借りれんぞ？今お前の親は2人とも出張なんだから？」

「何故知っているんだ！？」

「御本人にも聞いたしニアちゃんが嬉しそうに話してくれた」

この話をニアちゃんから聞かされた時はついに幸卓の人生という名のギャルゲが始まったかと思った。

この話をしているときのニアちゃんはすごくうれしそうで、既成事実でも作るんじゃないかと本気で心配した。

「それじゃ、俺は学年中のやつらに声をかけてくるから先に行くわじゃねー」

そう言って幸卓たちに声をかけて走りだす。

「まて、久遠、金を貸せ！！」

そう言って幸卓も俺を追いかけなるべく走ってくるが俺のほうで脚は速い。

俺が学校で登校していたやつら全員に声をかけたところで俺は幸卓に捕まった。

後でニアちゃんのお金を借りているところを見て俺は笑い転げていた。

刹那と幸卓に殴り飛ばされたけど。

1話 日常（後書き）

俺も久遠みたいなスキルがほしい。

by コミュカが圧倒的に足りない作者

2話 日常（前書き）

どうしようなかなか話が思いつかない。

2話 日常

「よーす」

俺は朝の挨拶とともに教室に入る。

既に幸卓には金を貸すなどいうために1度入ってきているのだが、何となく言ってしまう。

「おはよーす」

「おはよー」

続けて幸卓、刹那が教室に入る。

「谷口、はよつす」

俺は教室に入り、鞆をおいたら幸卓たちとは離れ適当に友人が集まっているところへとはいっていく。

「おつす、永夜。昨日のあのテレビ番組見たか？」

「あれって？」

「ほらあれだよ、あの」

「ああ、あれか見た見た」

ガラッ

友人たちと話していると再び教室のドアが開く音がした。

「麗華ちゃん、おはよー」

俺はたった今教室にはいてきた、ナユタ那由他 レイカ麗華に声をかける。

「話しかけないでくださいますか、ゴミ虫」

いつも通りの冷たい返しが返ってくる。

那由他麗華は那由他財閥という日本でトップクラスの大企業の社長さんの一人娘だ。

態度は高圧的で性格もまさに女王様。しかし外見はやたらとよく頭

もすごくいい、なんか全国模試で一桁しかとったことがないらしい。髪型は金髪のツインテール。身長は165センチ、スリーサイズは・・・えっ？あなたたちだれですか？真っ黒い服着て。まるでどこかの闇の組織みたいですよ？アレなんで俺を見てそんな鼻息荒くしてるんですか？ちよっ近寄るな、あ、あ、あ、アッー

体の起伏は平均並みとだけ言わせていただく。あれ？なんでまた現れるんですか俺もやられてばかりじゃいられねえ！！今度は俺から攻めるぞ、オラアッー！（ry

何故そんな天才で金持ちがこの学校に通っているのかは果てしなく謎だ。きつと幸卓のせいだろう。

きつと都合主義とかじゃなくて、世界の意味なんだ。それでまあこいつも幸卓に惚れている。理由はなぜか一人で町を歩いているときになぜか不良に絡まれなぜかその場にいた幸卓が助けに入った。という流れだ。

もちろん俺もその場において幸卓が麗華を連れて逃げた後の後処理は俺がやったのだがすでに麗華の瞳に俺は映っていなかった。

「幸卓さんおはようございますわ」

「那由他さんおはよう」

俺を虫けらの如く扱った麗華は幸卓に対し優雅に一礼し、続けて刹那にも挨拶する。世界はいつだって理不尽だ。

「刹那さんもおはようございますわ」

「麗華ちゃんおはよー」

「俺には？俺には？」

諦めずに再チャレンジ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

完全に無視された。

「幸卓さん何故あのような下賤な輩と友達なのですか？」

麗華は俺を本気で侮蔑するような目で見ながら幸卓に言う。

「俺の親友が何かお前に関係あるか？」

その言葉に怒ったのかどこか怒気を含ませた声でいう。

さすが俺の親友！！などといったくなつたが場の空気を読んで自重する。

「……！」

幸卓の言葉に麗華は何も言い返さずにただ教室から出て行つた。

もうすぐでチャイムが鳴るのだがわざわざ注意してやる義理もないので何も言わずにも送る。

「………」

教室に沈黙が流れる。

「でさあ、あの娘結構可愛くなかつた」

麗華が出て行くのを確認した後俺は友人たちとの会話に戻つた。

ほかのやつらも俺が話し始めたのを見て各々元の会話へと戻つていく。

キンコンカーンコン

チャイムが鳴りみんながそれぞれの席へと戻っていく。

「さつきはありがとな幸卓」

俺は席に戻る際幸卓の近くへ行き感謝の気持ちを伝える。

「気にすんな。」

それだけの会話だが十分だった。

麗華もチャイムが鳴り教師が入ってくる前には教室に戻り自分の席に座っていた。

だるい授業が始まり俺はノートを出して教師の言葉に耳を傾け黒板の字をノートに写す。

俺は真面目な生徒なんだ。決して授業中に寝たりなんかしない。と

ある情報筋から手に入れた情報を使って脅すことはあっても決して授業中に寝たりなんかはしないまじめな生徒だ。

キンコーンカーンコーン

授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。

「きりーつ、礼」

俺は授業の終わりの号令をして教師もそれを確認してから教室をでる。

俺はこのクラスの委員長なのだ。したがってこのクラスには委員長属性の少女はいない。

ちなみにだが、麗華が私が委員長を決める際に私がクラスのトップに立って当然。的な感じで立候補していたので性格面に難がありすぎだろと思いながらも任せようと思ったのだが、クラスメイトの一人、矢島が俺を推薦しやがったもんで仕方なくクラス全員からの支持をもらい委員長となった。

ん、どうやったかって。やだなあだれも俺に逆らえないんだよ？クラス全員の弱みはすでに握っているから。

「幸卓ー」

俺は席を立ったまま幸卓のもとへ向かう。

「お前にまだチケット渡してなかったから今渡しとくわ。」

そう言っただけからともなく取り出したチケットを幸卓に渡す。

「ありがとよ」

「ユキ、今度の日曜の話だけ」

俺たちがその会話をしているときにちょうど刹那が会話に入ってきた。

2人はどこに何時に集合するかなど話を始める。

俺はその二人を微笑みながら見つめる。

2人の話が終わりもうすぐで次の授業が始まる時間だったので俺も

席へと戻る。

ガララッ

チャイムが鳴る少し前に教師が教室へとはいってくる。

キンコンカーンコン

「きりーっ 礼」

キンコンカーンコン

「きりーっ、礼」

「「「ありがとうございます」」」

時が過ぎ午前最後の授業が終わった。

「やっど昼休みか」

俺は午前の授業が終わったことによる解放感としばしの休憩に思いをはせ伸びをする。

「さて、購買に行くか」

俺は誰にというわけでもなくそう言うど席を立ち購買へと向かう。

「久遠、焼そばパンとウル・ラサイダー買ってこい」

俺は教室を出ようとするど幸卓がそう言うてきた。

「俺はお前のパシリか!？」

「じゃああたしは、メロンパンね」

「刹那ちゃんまで!？・・・仕方ない、後で金徴収するから用意しとけよ」

俺はその言葉とともに教室からダッシュで出て行つた。

別に購買が特別人気というわけでもないが授業が終わつた昼休み開

始直後は人が多く並ぶ。

それに引つかかると普通ならだいたい時間がとられるためだ。

・・・といっても俺はその列に並ぶわけではない。

「ふう、ついた」

俺は急いで構内に駆け付けたのだがそこには既に10人ほどの人だかりができていた。

俺は何食わぬ顔で店側と学生を分ける板の奥のほう店側の領域へ行く。

「おばちゃん、焼そばパン二つとメロンパンあとラスク頂戴」

俺はそう言ってパンと引き換えに代金を渡す。

それを見ていた俺が来る前に並んでいたやつらは不機嫌そうな目で俺を見るが俺だとわかった瞬間に目をそらす。

理由は察してくれ。

あまり人が多いときはあまり使えない。

購買側も忙しいだろうしまじめに並んでいる奴らがかわいそうだからだ。それでも人気商品は取っておいてもらってる。

理由はコネだ。

「あとはウル・ラサイダーと俺お茶を買ってと」

頼まれた物と自分の分を買い再び教室へと戻る。

「おまたせー」

教室に戻り俺は幸卓に焼そばパンとウル・ラサイダー、刹那にメロンパンを渡して代金を回収する。

「よく二つも買ってこれだな、焼そばパンは人気ですぐに売り切れるんだろ？」

「俺のコネの力だ」

「クオンのコネっていったい何なのよ・・・」

昼休みは幸卓と刹那とでいつも通りの実のない馬鹿話をしながら過ごした。

キンコンカーンコン

「やっつと終わったか」

午後の最後の授業も終わり俺は机に突っ伏す。

ガララッ

「HR始めるぞー」

担任の教師が入ってきて帰りのHRを始める。

「・・・以上だ」

とくに重要な連絡事項もないままHRが終わり解散する。

「永夜ー今日一緒にゲーセンいかね？」

「よし、いこうぜ平本」

俺は友人平本に誘われ何人かとともにゲーセンへと向かう。

幸卓はどうやら刹那と帰るようだ。おそらく途中でニアちゃんと一緒になるだろうな。

幸卓の背中を見送りながら俺も教室を出ていく。

「今日こそ俺はお前らの得意なゲームにすべて勝ち切ってやるよ」

「やってみな、チャレンジャー」

「俺のドライブテクを見せつけてやるぜ」

ゲーセン内にて

「クレインゲームの帝王と呼ばれた俺を読んだか？」

「おいおい、トリプルAの称号を持つ俺に挑もうとはどんな無謀な輩だ？」

「俺の目はスロットの回転をたやすく見切る、今だっ！……」

「目標をセンターに入れてトリガー、目標をセンターに入れてトリ

「ガー」

「トリガーに目標を入れセンタートリガーに目標を入れセンター」

「なんか違うね!？」

「見ろよ俺のこの華麗な足さばき、本来不可能な四つ同時押しだつてできるぜ!!」

「お前の体どうなってるの？」

.....

「相変わらずお前の音ゲーのスキルすげえよな」

「でも俺レース系とか苦手だぜ」

「格ゲーなら負けん」

「そのすべてにおいて1位はとれぬものの上位にいる俺は異端」
「それぞれが思い思いのことを口にしながら別れていく。」

「じゃ、またな」

「じゃな」

俺は小さくなっていく友人の背を見送る。

「ハアッ」

友人の後ろ姿が完全に見えなくなると俺はため息をつきながら歩き出す。

みんなと別れた後はテンションが急に下がる。

「.....」

俺はただ無言で歩く。喋る相手がいないというのもあるが心の中で何か考えることすらだるく感じる。

感覚的にはもはや惰性で歩いている、そんな感じだ。

家に帰りたくないわけでもなくてただ本当に何もやる気が起きなくなるだけ。

家の玄関の前までたどり着き鍵を開けて家に中に入る。

「ただいま」

返してくれる人などいないとわかっているため小さな声でいい、靴を脱いでそのまま自分の部屋の中へとむかう。

友人といるときに騒いだ分だけ俺は家の中では暗くなる。

「・・・」

何も言わずにベットに倒れ込む。

2話 日常（後書き）

雰囲気落差が激しい気がするがまあいいや。

3話

「ん」

どうやら眠ってしまったていたらしい。

外を見てみると結構暗くなっていた。時計を見ると時計の針は8時を指していた。

グー

お腹が鳴る。

「腹が減った。何か、食うもんあるかな・・・」

ふらふらとした足取りで台所へと向かう。

冷蔵庫を開け中身を見る。

中であつたものを適当に摘み腹を見たしたら新聞紙を持って再び自分の部屋へと戻る。

持ってきた新聞紙のテレビ欄を見ながらテレビのチャンネルを適当に変え、パソコンを立ち上げる。

適当に友人たちが見そうなチャンネルに合わせたらそれを流し見ながら、ネットを立ち上げる。

俺がテレビを見る理由は友人と話を合わせるためだ。べつにしっかりと見ている必要はないし、あまり面白いとも思わない。

トップページに表示されているニュースの中から何となく気になるニュースを見つけたらそれを検索する。

カタカタカタ

俺のキーボードを打つ音とテレビの笑い声だけが聞こえる。

気になったニュースを調べ終わったら次はよくいくお気に入りのサイトを更新されていないかチェックするために一巡する。

いくつかのサイトは更新されていたので更新された分を読みながら時間をつぶす。

サイトを一巡したところで時計を見る。

時間はだいたい9時頃だ。することは無くなったが寝るにはまだ早

い時間だし先ほどまでは寝ていたので眠気もない。

ー そう言えば最近あそこにログインしてなかったな。

そういつて俺はお気に入りの中のディラックストーンをクリックする。

ディラックストーンはどこにでもあるような普通の多人数同時参加型のオンラインのゲームだ。

最初にプレイヤーは5つの国から所属する国を決めそこでほかの4つの国と仲間とともに戦い領土を奪い取っていくものだ。

物語の設定はこんな感じだ。

物語は一つの大陸、グランドから生まれた。グランドは5つの国、火の国 エンデ 水の国 ラピス 風の国 フー 土の国 ソイル 雷の国 バイア

に分かれすべての国が大陸を支配しようと手に入れようと常に戦争状態にあった。

あなたはその国のどこかの兵士となり、祖国を勝利に導こう。などというようなものだ。

俺は土の国ソイルに所属している。

俺がログインすると早速見知った名前のキャラクターが話しかけてきた。

「メア：ハルトくん、ひさしぶり〜ノノノ」

「ハルト：だつて久しぶりのログインだもんwwwメアも久しぶり」俺のAvatar名はハルト、Avatarの職業は盗賊^{シーフ}だ。

早速俺に話しかけてきたのは俺がディラックストーンの入ってからすぐに仲良くなった友人メアだ。

といつてもすんでいる場所はかなり離れているため実際に会ったことのない人だ。

この人のAvatarは女キャラクターだがで実際の性別も女の人らしい。

この人のアバターの職業は魔女だ。ウィッチ

ディラックスターンの世界にはいくつかの職業が存在する。

ナイト 戦士、マテリアル 武道家、銃使い（ガンナー）、魔法使い、魔女（男・ウィザード、女・ウィッチ）、シーフ 盗賊だ。

今上げたのは基本職でレベルを上げると上級職になることができる。上級職の数はかなり多く、基本職ごとになれる上級職は決まっている。

俺は最近そこまで入り浸っているというわけでもないのでまだ基本職だ。

一方メアは先ほどは魔女と言ったがその上級職のひとつ 召喚使い（サモナー）になっている。

最近色々あつてきていなかったが俺はMMOのゲームは好きだ。

第一に適度な距離感で相手と接することができるからだ。互いが互い実際に会うわけもないからそこでまず距離がある。

それに途中で話が合わなくなってくれば簡単に別れることができる。つまりある程度の協調性は必要だが周りに流され続ける必要もないわけである。

だからよく話す人とは本当に色々よく話すし相談にも乗ったり乗ってもらったりしている。

「メア・ハルトくん最近見ていないってみんなさみしがってたよ」

（^^）

「ハルト・ちよつと最近忙しくてね（汗）」

「ハルト・ちよつとみんなのところに顔出してくる。メアのほかに誰がいる？」

「メア・たいちよさんとクネア君がいるよ」。私もハルト君といっしょにいくよ」

「ハルト・ありがと、なんか最近変わったこととかあった？」

俺はメアと話しながらたいちよさんとクネアのところへと向かう
たいちよさんとはアバター名ではない。なぜたいちよと呼ばれるか
というとディラックストーンの戦闘において、色々と作戦を考えて
くれたり指令を出してくれたりするから、いつの間にか体調と呼ば
れるようになったが本人があまり体調と呼ばれるのか硬い感じがす
るからとひらがなでたいちよということになったのだ。

たいちよさんの実際のアバター名はルシフェだ。職業はホーリーナ
イト 防御力が前職業中最も硬く補助系魔法まで会得するに出た
ら厄介NO1に輝く職業だ。

実際にはもつとうざい奴とかもあるのだがホーリーナイトの場合は
その存在自体がもはや厄介。攻撃しても攻撃力の高い職業じゃない
とダメージほとんど通らないうえに魔法に対する防御力も高い。
つまり基本パラメーター的に厄介なのだ。

もう一人のクネアも職業はガンナーの上級職のビックカノンと呼ば
れる職業だ。

この職業の特徴は武器は大砲といえいいだろうか。攻撃速度も防
御力も基本パラメーターは低いが攻撃力だけは異常に高い。まとも
に食らえばホーリーナイトでもかなり体力を削られる。

それ以外の職業に当てたら防御力の引く職業は一撃で終わり、それ
以外でも2発喰らえばほぼ確実に殺せる。ギリギリ避けても着弾地
点からも破片が飛んだりしてそれによっていくらかダメージを受け
る。

戦場であつたら速攻でつぶしたい職業NO1だ。防御力も攻撃の速
度も遅いため普段ならあまり活躍はできない職業だが、うちには全
職業中NO1さらに防御力を一時上げたり攻撃速度を上げたりする
魔法も会得しているホーリーナイトことたいちよさんがいるため、
潰されることなくかなり活躍している。

「ハルト：たいちよさん、クネアおひさ〜」

たいちよさんとクネアを見受け早速挨拶する。

「ルシフェ：よっす、久しぶりだな」

「クネア：おひさ」

俺の挨拶にたいちよさんが最初に返し次にクネアが返してくれる。

「ルシフェ：最近見かけなかったがどうしたんだ？」

たいちよさんが俺に話しかける

「ルシフェ：まさかこれ（そつと小指を立てる）ができたんじゃないのか（笑）」

「クネア：つとんがりコーン」

「ハルト：（そつと小指にとんがりコーンを被せる）」

「メア：何やってるのwww」

クネアがとんがりコーンをくれたので俺はたいちよさんの小指にとんがりコーンを被せた。

「ルシフェ：何だいいいのか、彼女とか作っておいたほうがいいぞ。」

「メア：はいはい、奥さん自慢はもういいから」

奥さんの自慢を始めようとするたいちよさんに対しメアが釘をさす。

ちなみにたいちよさんは普通の会社員らしい。どれくらいの立場にいるか知らないがこんな人のもとで働きたいものだ。

クネアは俺と同じくらいの年らしい。自称だがミリタリーオタらしい。

メアさんは既婚者で専業主婦らしい。子供が一人いて今は小学生らしい。家事が終わって暇な時間によくディラックストーンに来ているといつていた。

まあ、すべて自己申告だから俺から見れば自称でしかないのだが確かめるすべもないし、必要もないので真実だろうがウソだろうがどうでもいい。

「ルシフェ：まあ、でもクネアもハルトも彼女は作っておいたほう

「がいいぞ」

「ハルト：たいちよさん、作れる彼女がいないです（；|；）」

「クネア：武器があればそれでいい」

「メア：武器ツ子萌えwwww」

「ルシフェ：俺の妻の武器は包丁、迂闊に女の人とに見に行くことができないgkbr」

「どうやら、たいちよさんの奥さんは結構怖いらしいな。」

「ハルト：つ、市役所でもらった一枚の紙」

「メア：ハルト君それは渡しちゃだめー！！！」

「ルシフェ：何だよそれ！？」

「クネア：自分の判と奥さんの判を押せば成立するもの？」

「ハルト：クネア、正解。というか一種で分かったメアさん流石wwww」

「メア：念のために1枚はもらってあるしね」

「ハルト：使わない日が来るといいですね」

「メア：そうだね」

「ルシフェ：お前は俺を殺す気だったのかwwww」

そのあともしばらく4人で話しながら戦いへ行ったりして、楽しいひと時を過ごした。

俺はこういう文字だけでの会話が好きだ。なぜなら自分をいくらでも偽れるからだ。

文字だけならば画面の向こうの話し相手の気分なんてわかるわけがない、ただ言葉の最後にwwwとつけるだけでも相手は会話を楽しんでいる、などと思うだろう。

実際に会話は楽しんでいるのだが、今だ俺の気分は暗い。

文字上で彼らと会話しただけいくらかマシになったが幸卓や友人たちと会話しているときに比べると断然テンションが低い。

「原因はわかってるんだけどな。」

たぶん俺は幸卓の前でも自分を偽っているのかもしれない。学校で幸卓と話しているときと家にいるときの俺、どちらが本当の俺なのかは分からないし、ひよつとしたらどちらも違うかもしれないしどころも本当の俺なのかも知れない。

本当に自分で幸卓たちに接してもいいのだろうか、もし俺が刹那に告白して断られたと気が辛いから自分を創っているのかもしれない。これは本当の俺じゃないから大丈夫。断られるのは分かっていたことだ。

自分を創ればある程度は客観的に自分を見ることができる。そうすれば逃げ道を作ることができる。

なんてことはないただ、俺は逃げているだけ。今の日常が壊れるかもしれないと恐れているだけ。

「本当に何やってるんだろうな、俺は。今日はもう寝よ」

そう言つて再びパソコンのディスプレイを見つめキーボードを打つ。

「ハルト：今日はもう眠いから落ちるよ zzz」

「メア：おやすみ」

「ルシフェ：お休み」

「クネア：おやすみ」

そう言つて俺は落ちると時計を見る、

「11時過ぎていたのか」

時間を確認した後に俺はベッドに倒れ込む。

「明日も学校だ、幸卓たちと会ったからいつも通りの俺を演じないとな。」

3 話（後書き）

久遠の先はどこへ行くだろうか・・・

4話（前書き）

俺はこれをシリアスにしたいのだろうか？
ギャグにしたいのだろうか？

4話

「はよーす」

いつも通りの朝、いつも通りの場所で幸卓たちと出会っていつも通りに会話し始める。

「今日は金曜日だ、明後日の準備しつかりやってるか？」

幸卓はあまり自分からは外へ出かけようとしないので俺が何か言わないと前日になって慌てるだろう。

流石に俺がさそった手前、そういうことが起きると何か釈然としな
い気持ちになるため俺は準備しておくように言う。

しつかり者のニアちゃんがいるからそうならないのかも知れないが、ニアちゃんも兄の幸卓にはデレデレなので果てしなく不安になる。

「やってるよ。」

おお、珍しいこともあるものだ。てつきりこいつのことだからやっていないかと思っていた。

ニアちゃんが言ってくれたのだろうか？そう思う俺は幸卓はつづけて話していく。

「昨日散々刹那からメールが来たからな、ちゃんと日曜日の準備してる？って」

「なるほどな、そりゃあ流石にお前でもやらざるを得ないわけだ」

「どういう意味だそれは。」

「言った通りの意味だが？」

「てめえ」

そのあと俺たちはいつも通りの馬鹿話を続けながら学校へ向かっていった。

本当にいつもと同じなのだ。俺はいつも通り自分の心に嘘をつく。本当は幸卓がうらやましい、自分の好きな人と一日過ごせる。だけど俺はそれを表に出さない。いや、出せない

もし出してしまつたら、幸卓の友情も壊れるかもしれないし、刹那とも話をするだけでも難しくなるかもしれない。

それに俺は刹那のことが今でも好きだから。好きだからこそ俺は刹那に刹那が望んだ結末にたどり着いてほしい。

本当は俺が刹那と一緒に道を歩みたい。だけど刹那は俺を見ていない。せめて、他人ではなく友達でもいい。だから俺は自分自身に嘘をつく。

――俺はあくまで脇役なんだ、そう自分に言い聞かせて。

「はよーす」

俺たちはいつも通りに教室に入る。

俺はいつも通り幸卓たちとは離れて適当な友人たちのグループに入り話し始める。

「昨日のあれみた？」

「見た見た！」

「あれってやつぱやらせだよね」

「いくらもらつたんだろうな、ああいうの。俺もやってみたいわ」

ガララッ

少し話しこんでいると再び教室のドアが開いた。

「おはようございますわ」

「・・・」

教室に麗華が入ってきた第一声にそう言った。

クラス中のみんなが哑然としている。

それも当然だろう、今まで麗華は自分の友達、というか幸卓の周りのやつらにしか挨拶をしていなかった。

その幸卓の周りのやつらに俺も入っているのだが俺だけは例外だった。

しかし今日は第一声にクラスの全員に行ったのだ。哑然とするのも無理がなからう。

というか俺が一番驚いている。おそらく昨日の幸卓の言葉が聞いたのだろうか？どう捉えたのかは知らないけど。

「麗華ちゃんおはよう」

クラス中が驚いている中刹那と幸卓は驚いていないようだ。

「刹那さん、おはようございますわ。幸卓さんもおはようございます」

「那由他さん、おはよう」

「麗華ちゃんおはよう」

俺も声をかけてみる。

「あら、もうあなたには挨拶はしたので話しかけないでくださいますか？」

・・・うん、予想していたけどやっぱり駄目だった。

「でさあ、アレどう思う？」

再び俺は友人たちの会話へと戻っていく

「しかし、ホントお前すごいな。いつもあんな拒絶されてんのによく話しかけれな」

「いつか俺のこの努力が報われると信じているからな！！」

俺は胸を張って答える。

もちろん嘘だ。報われるなんて全く思っていない。ただ何となくやつているだけだ。

那由他麗華が幸卓と話しているから俺も話しかけようとしているだけだ。

それに俺自身が那由他麗華のことをなんとも思っていない。だから何を言われてもどうとも思わない。

「ホント、尊敬するわ。お前」

「俺もだわ」

「じゃあ俺も」

「お前もか、実は俺もなんだ」

コントみたいな展開になったがとりあえず今話していた友人全員は

俺を尊敬したようだ。

「やれやれ、お前ら、愛してるぜ！お前ら、俺について来い！！」
感極まり俺らしくないことを口走ってしまう。

「……教祖様——！！！！」

尊敬の対象だから教祖なのだろうがそれでは俺が怪しい人みたいだ。

「俺についてくればお前らは幸せになれる！！！」

「……ウオオオ——、教祖様——！！！！」

何やってるのかと自分でも思うがテンションが高いキャラが俺の学校での俺だ。

「……ウオオオ——、教祖様——！！！！」

「……」

だんだんと増えていく信者とともに盛り上がりながらチャイムが鳴るまで叫び続ける。

キンコンカーンコン

いつも通りの代り映えのしない午前の授業が終わり俺は購買で昼飯を買うために椅子から立つ。

「……」

ちらつと幸卓たちを見るが刹那は日曜日のことで幸卓は授業で疲れたのか机で突っ伏している。

今日も何か頼むかな？とも思ったがこの様子ではそれはなさそうだ。そう判断して俺は教室から出る。

ワイワイワイワイ

相変わらず今日も購買は混んでいる。俺は昨日とは違い歩いてきたため既にたくさんの人が並んでいる。

「今日は普通に並ぶか。」

そう呟いてから俺は購買の前に群がる人の集団の中へとはいつていく。

「永夜ー、今日もゲーセンいかな？」

教室で珍しく一人で昼飯を食っていると谷口が放課後の予定を誘ってきた。

「すまんが、今日はバイトがあるからな、お前らといると出る時間に確実に間に合わなくなるからやめとくわ」

俺はそう言って谷口の誘いを断る。バイトといっても怪しいバイトではなく普通のバイトだ。

「なら仕方ねえな、お前がいると俺らもついヒートアップしちゃうしな。」

そう言って谷口は大人しく引き下がる。

「また今度誘ってくれな」

何も言わないままはまずいのでそう言ってこの話を打ち切る。

「ところでさ……」

俺は自分から適当な話題を振り、話を打ち切った後の沈黙を流す。

キンコーンカーンコーン

そうしている間に昼休みが終わり午後の授業が始まる。

キンコーンカーンコーン

時間が流れて最後の授業が終わり、HRの時間になる。

「……連絡は以上だ。じゃあ気をつけて帰れよ」

いつも通りの特に気にすることのない連絡を聞き流し、俺も席を立つ。

「おおそうだ、久遠寺、お前には話があるからちよつと教室に残っている」

教師が何かを思い出しかのように俺を呼びとめる。

「はい、わかりましたー」

俺は教師の言葉に従いクラスのみんなが帰るまで教室で待つ。

「それで、なんですか、先生？」

俺は全員がクラスから出て行ったのを確認してから教師に聞く。

「ああ、来週ここに転校生が来る。」

ああはい、幸卓のせいですね。わかります。なんか色々ツツコミどころあるけど幸卓がいるし仕方がないな。

「この時期に転校生って珍しいですね。どうせ女の子でしょ？」

「ーしかもとびきりの美少女の。とは言わない。」

「よくわかったな、その通り女子だ。」

教師は驚きながら答える。どうせ複雑な事情を抱えてたりするんだろな。

とりあえず何かあった時のために今のうちに色々と準備しておこう。心の中でそう思いながら教師の話を流し聞いていく。

「しかし、良いんですか？そんな情報俺に流しても」

「お前に言っても言わなくてもどちらにせよ不思議とどこからか情報が流れるんだよねあ、お前に言っておかないとそれと同時に俺に不利な噂も流れるし。」

そう言っただけをちらりと見る。はい、俺が流してますけど何か？

「それは大変そうですね、じゃあ俺は用事があるのでこれで」

そう言っただけ俺は逃げるように教室から出ていく。

教師と話すために一人教室で待っていたため一緒に帰るようなやつらは誰もいない。

なので俺は珍しくどこにも寄らずに一人で家に帰る。

家に帰ったらすぐにバイトにいく準備をして家を出る。

「いつてきます」

当然返してくれる人などいないがつい言ってしまう。

「おはようございまーす」

バイト先に着いたら同じバイトの人や店長さんなどに挨拶して休憩室に入っていく。

おはようございますは店の人同士の挨拶だ。なぜおはようございませうか知らない。

俺は休憩室で出勤する時刻まで時間をつぶす、

「じゃ、朝礼を始めます・・・」

「じゃ、お先に失礼しまーす。お疲れ様でしたー」

とくに問題もなくバイトも終わり俺は帰宅する。

「ただいま」

俺は帰ったら早速シャワーを浴びたあと、自分の部屋に入っていく。いつもどおりパソコンを立ち上げ、ディラックストーンを開く。

時間的には結構遅いがひよっとしたらたいちよさんたちがいるかな。そんな希望を抱く。

・・・

たいちよさんたちがログインしているかを確認してみがた誰もログインはしていなかった。

俺はたいちよさんたちと会話するのを諦めてきとくにディラックストーン内で遊ぶ。

「ふぁーあ」

1時間ぐらいプレイしたところで眠気が襲ってきた。

俺はそのままログアウトしてベッドの中へとはいっていく。

「明日は・・・そうだ、幸卓にデートコースとか教えておかんな。どうせあいつのことだしそう言うのは全然調べてないだろうしな」
刹那には楽しんでてもらいたいものだ。

あいつの近くにいられるだけで刹那はいいのかもしれない。だからこれは俺の自己満足だ。

明日の予定を頭の中で組み立てながら俺は眠りについた。

5話（前書き）

こっちのほう全然進まない

5話

ピピピピ

俺はいつもと同じように目覚まし時計の音で起きる。

今日は土曜日だ。

いつも通り朝食を作り、午前中はバイトがあるのでそれまでは家で適当に時間をつぶす。

バイト先に出かけるまではあと2時間ほど余裕がある。

俺はパソコンを立ち上げ適当にニュースを調べたりしながら時間をつぶす。

「そろそろ行くか」

時計を見ると出るにはちょうどいい時間だったため俺は支度をしてバイト先へと向かう

・・・

「疲れた」

バイトを終え俺は家に帰る。今の時間は約1時半昼飯はまだだ。適当に冷蔵庫の中にある食材で昼飯を作り、俺は幸卓にメールする。

宛先： 村井幸卓

件名：明日の件だが計画はしてるか？

本文：お前明日のことだが、まさか無計画なんてことはないよな？

俺は携帯で幸卓にそうメールを打つ。

「送信つと」

幸卓のことだから確実に計画なんざ立ててないことを確信しつつそのメールを送る。

いくらあいつが暇人とはいえ常に携帯がそばにあるとは限らないし、電波の届かないところにいる可能性もあり得る。

すぐには返信来ないだろと思い、俺は昼飯を食うことに専念する。

ブーブー

俺がちょうど昼飯を食い終わり、食器を洗っているときにメールが来た。

幸卓からか？と思い、食器を洗い終えてから形態を確認するがサイトからの広告メールだった。

「幸卓から返信来るまでの間に、俺のほうで計画練つといてやるか」俺は計画を詳細に練るために自分の部屋へ行き、すぐにパソコンをたち上げる。

「水鷺遊園地、と」

俺はインターネットを立ち上げ周辺地図や中にどんなアトラクションがあり何が人気か、飲食店を調べる。

・・・

ブーブー

「ん、メールか」

俺は明日の幸卓たちの計画を練るのにいつの間にか夢中になっていたようだ。

気づけばもう時間がそれなりに立っていた。

「・・・幸卓からだ」

俺は早速届いたメールを開く

From: 村井幸卓

To： 久遠寺永夜
件名：
本文：ない

幸卓からのメールは完結過ぎた。これではどちらの意味でも捉える事が出来てしまう。

宛先：村井幸卓
件名：どっちだよ

本文：たててであると捉えていいな？

俺も簡潔に返す。

ブーブー

From：村井幸卓
To： 久遠寺永夜
件名：俺が立てているはずが
本文：ない

・・・だよな。

宛先：村井幸卓
件名：お前それで
本文：大丈夫か？

From：村井幸卓
To：久遠寺永夜
件名：大丈夫だ
本文：問題ない

宛先：村井幸卓
件名：あいつは人の話を聞かないからな
本文：ああ、今回もダメだったよ・・・じゃなくて信じるぞ

From：村井幸卓
To：久遠寺永夜
件名：スマン
本文：教えてくれ

宛先：村井幸卓
件名：まさかお前からネタを振ってくるとは思わなかった。
本文：自分でも考えてみるよ、少しぐらいなら教えてやる。

From：村井幸卓
To：久遠寺永夜
件名：ニアがよく言っていた、俺はよく知らん
本文：時間がなさすぎるだろ。

宛先：村井幸卓

件名：ニアちゃんエ

本文：分かった、おれのさつき立てた計画でいいなら送ってやる。

From：村井幸卓

To：久遠寺永夜

件名：分かるお前は流石なのか？

本文：助かる

宛先：村井幸卓

件名：むしろ知らんお前がおかしいくらいネタになってる。

本文：ゝ長いので省略ゝ

From：村井幸卓

To：久遠寺永夜

件名：俺は世間に疎いからな

本文：ずいぶんと細かいな

宛先：村井幸卓

件名：引きこもってるなら動画共有サイトくらい巡回してろ

本文：ああ、結構張り切って立てたからな

From：村井幸卓
To： 久遠寺永夜
件名：俺がやるとフリーズ確率が高くてあまり使えん
本文：何故お前が？

宛先：村井幸卓
件名：お前機械に嫌われ過ぎ
本文：俺がお前らに行けって言ったんだから失敗されると俺が嫌だ。

From：村井幸卓
To： 久遠寺永夜
件名：もう慣れた
本文：そうか、じゃあな、助かった

宛先：村井幸卓
件名：乙
本文：次からは自分でも努力しろよ ノシ

淡々としすぎた俺と幸卓のやり取りを終える。

「さて、今からどうするかな、」

俺は一旦パソコンの電源を切り、外へと出る。

今日は肉の特売日だ、逃すわけにはいかない。この日をおいて肉を買わない日はない。

「ん、あれニアちゃんか？」

スーパーによる途中俺はニアちゃんと思しき人影を発見した。

「おーい、ニアちゃん」

俺はその人影に手を振り、名前を呼べながら近づいていく。

「どうしたんですか永夜さん、こんなところで」

俺はニアちゃんのすぐ近くまで小走りで近づいていく。

「俺はちよつと買い物にね、ニアちゃんは？」

「私も買い物です、お父さんとお母さんは出張でいないので私が料理を作るので。」

「なるほどね、でも買い物くらいだったら幸卓連れてくればよかったのに」

「兄さんは明日の準備があるとかで色々動き回っていたので声かけづらくて」

アハハと笑いながらニアちゃんは言う。

本当によくできた妹だと思う。

「それじゃあスーパーまで一緒に行かない？よかったら荷物も運ぶの手伝おうか？」

「うーん、大丈夫ですよ、買うのは2人分だけですからそこまで重くないですし、また今度お兄ちゃんを連れてきた時にたくさん買いますから」

俺の誘いをニアちゃんはやんわりと断る。ニアちゃんは俺そこまでさせるのを遠慮して断ってるだろうし、それほど買い込むつもりもないのだろう。

「そっか」

俺も断られたのでそれ以上言うつもりもないし、まあもつのが大変そうだったら手伝えばいいだろう。

「ニアちゃんはどこで買い物するつもり、あそこのスーパーだったら俺も一緒だけど」

「私もあそこで買い物を買いますつもりです、家からは一番近いですし、あそこは結構安いので」

「それじゃあそこまでは一緒に行こうか」

そう言うて俺はニアちゃんと一緒に歩き出した。

スーパーの中ではニアちゃんと新鮮な野菜の見分け方などの話をしながら盛り上がった。

基本的には俺が一方的に教える立場だったがニアちゃんは真剣に聞いてくれていたので俺もつい調子に乗ってしまった。

「あはは、つい買いすぎてしまいました」

俺が調子に乗って一回で教え過ぎてしまったせいか、ニアちゃんの細腕では持つのが辛そうな量になってしまった。

「俺が持つていつてあげるよ」

俺はニアちゃんの返事を聞く前にニアちゃんの買い物袋を取り上げる。

「え、あ。」

「ほら行くよ。」

ニアちゃんは俺の行動にすまなそうな顔をする。

俺はそれを気にせず自分の買い物袋も持つて歩き出す。

「ニアちゃんがこの量を家まで持つてくのは辛いでしょ」

「でも・・・」

ニアちゃんは俺が自分からやっているのにまだ遠慮している。

「この借りは幸卓にでも変えさせるからきにしないでいいよ」

俺はそう言うつとどんどん進んでいく。

途中からはニアちゃんと普通に話すようになったが、どうにも俺の持つ荷物によく視線を送っていた。

本当に幸卓にはもったいないくらいの子だと思う。

そうして話しているうちに幸卓の家へとついた。

「ただいまです」

幸卓の家の玄関をくぐりニアちゃんが帰宅の挨拶をする。

幸卓の姿は見えない。そこまで準備に時間がかかるものなのだろうか？考えても仕方がないが、気になってしまう。

「荷物はここに置いておくよ」

だけど変に詮索するのは何かおかしい気がしたので俺はニアちゃんの分の荷物を下ろす。

「じゃ、俺は帰るよ、幸卓に今回の件は貸しな、と言っておいてくれ」

俺はそう言つて体の向きを百八十度回転させ家から出ていく。

「荷物を運んでくださってありがとうございました。」

出ていくときにそうニアちゃんの声が聞こえた。せめて何か一つくらいあってもよさそうだったが、幸卓という時間を邪魔されたくないとの心の奥では思っていたのかもしれない。

俺は自分の買い物の分を持ち、家へと帰る。

6 話（前書き）

全然話が思いつかん。超展開ごめん。そしてめちゃくちゃでごめんなさい

6 話

力
夕
力
夕
力
夕
力
夕

家に帰り俺は早速ディラックストーンをやっていた。

ハルト・クネアこんちわ

クネア：おう、今はメアもたいちよさんも来てないよ

どうやら今は俺とたいちゃんしか来ていないようだ。

ハルト：二人でどうかの戦場行かね？クネアいりやあうまくいきやかなり有利になるし

クネア：いいよ

ハルト：じゃ、適当なところ行こか。

その後しばらくは俺とクネアで戦場を駆けまわった。文字通り俺はスピード主体のシーフだから駆けまわったが、クネアは遠くから砲撃していた。

クネア：ヒャッハ————

ハルト：クネア自重 W W W

クネア：俺の太くて重くて黒いの喰らってみたいなか？

ちなみにだがクネアは戦況が有利な時はこんな風に暴走する。

ハルト：しまったそっちに一人アサシンが行った。

クネア：遅いよ。

がくつとテンション下がったな、クネア。

クネア：ギヤアアアアアアアアアア――

ハルト：ビツクカノンが前進しすぎるからだ、ヤムチャしやがつて
クネア：すぐに復活するからいいだろ。これは一定ポイントとるま
で続くんだから。

クネアが後方の自陣にて復活を遂げる。

ルシフェ：おいおい、俺がいない間になにドンパチやってんだよ。
まったく。

ハルト：来た、メイン盾来た、これでかつる。

クネア：だつてたいちよさんいなかったし。

ハルト：>>クネア

ルシフェ：>>クネア

以下この会話を見ていた味方全員。

ルシフェ：ステキナイトの登場だ。

ハルト：キターーーー（・・）—————！！！！

以下ルシフェ、クネア以外の味方全員。

ハルト：クネア空気読め

ルシフェ：クネア空気読め

以下クネア以外の味方全員。

その後はたいちよさんが鉄壁の守りを見せ難く敵を打ち破った。

ルシフェ：明日は日曜か。お前ら一日中こっちに入っているような
廃人にはなるなよ？

クネア：通販サイト見てます。

ハルト：日曜日は基本家にはあまりいないんで

ルシフェ：クネア、結局一日中パソコンやってるのか・・・

ハルト：ちょｗｗ一緒にねえかｗｗ

クネア：そう言えばハルトは日曜あんま見たことないけどなにして

る？

ハルト：ちよいと野暮用をな

実際は日曜日は父親が唯一戻ってくる可能性のある日だから家にいないだけだ。毎回戻ってくるというわけではないけど会いたくないから俺は日曜日は極力家にいないようにしている。

ちなみにこのことはたいちよさんにだけは話してある。色々相談に乗ってくれるいい人だ。

クネア：たいちよさんはなにしてるですか？

ルシフェ：日曜出勤しているお父さんだ。

ハルト：お疲れ様です

クネア：お疲れ様。

ルシフェ：学生のうちに休みは満喫しておけよ。

たいちよさんから貫禄のあるお言葉をいただいた。

ルシフェ：そんな冗談はさておき、時々家族で遊園地に行ったりしているぞ。

ハルト：冗談かよ！？

クネア：だまされた。

ルシフェ：3割方な。

ハルト：残りの7割エ

ハルト：そういえば今日はメアさんを見てませんけど？

ルシフェ：主婦だって結構忙しいんじゃないのか？町内会いの寄り合いとか

クネア：めんどくさそ

ルシフェ：人付き合いは結構重要だぞ。

ハルト：人脈があればすごい便利。

クネア：人づきあい苦手

ハルト：慣れる

ルシフェ：こっちでは結構話してるのにな

クネア：画面の向こうだっていう安心感がある。

ハルト：全面的に同意ww

ルシフェ：俺の上司も画面の向こう側で説教だったらな。

ハルト：がんばってくださいたいちょ　つ栄養ドリンク

ルシフェ：ありがとよ

クネア：大人の玩具

ハルト：何渡してんだよwww

ルシフェ：妻と一緒にそのおもちゃで遊んでくるぜ。

ハルト：たいちょさん・・・爆発しろ

クネア：爆発しろ

ルシフェさんがログアウトしました。

ハルト：逃げやがった。じゃあ俺も落ちるわ。じゃな

クネア：じゃ

ハルトさんがログアウトしました。

「俺も刹那と・・・いや、妄想もやめておこう、現実が辛くなるからな、ハアッ。今日はもう寝るか」

俺はPCの電源を落とし部屋の電気を消す。

「お休み」

俺は誰もいない暗闇にそう呟き、瞼を閉じた。

ピピピピ

「今日は日曜日、か」

俺はいつもよりも早く目覚まし時計に起こされる。

「さっさと飯作って家出るか」

俺はいつも通りに着替えてから朝飯を作る。

「行ってきます」

俺は誰もいない家でそう呟き家を出た。

俺と父親の関係は血のつながった他人、これが一番いい表現だろう。別にあっても話さないし、特に何もしない。

ただ同じ家の中に他人がいると気まずい、だから俺は家を出ている。例えば自分の部屋の中に閉じこもっていたとしても他人が家の中にいると落ち着かなし、いい気はしない。

だから俺は日曜日には父親が返ってくる保証はないが家を出ている。家の中では会いたくないから。

「今日は幸卓と刹那のデートの日か、見送りにでも行こうかな？」

俺はうすら笑いを浮かべながら住宅街を歩く、商店街のほうへ行ってもどの店も開いていない。

「いつも通り適当にジョギングでもしてるか」

時間としてはまだ7時前、朝にジョギングしている人も見かける時間帯だ。別に不自然なことではない。

「っと、その前にあいつらに今日遊べるか聞いてみるか」

俺はメールアドレスに乗っている友人手当たり次第にメールを送り、ジョギングを始めた。

この時間帯は大体あいつらは寝ている、返信が返ってくることはまずない。なので安心して俺は携帯をポケットに入れ走り始めた。

「ハアッハア」

しばらく走った後俺は近くの公園で休憩していた。のどが渴いたので水を飲む。

「さて、返信は来てるか？」

俺はポケットから携帯を取り出し着信があるかをチェックする。もちろん来ているとは思っていないが念のためだ。

・・・やはり来ていなかった。休みは昼まで寝ているような連中だ、期待はしていない。

俺も昼まで寝ていたいのだが起きてすぐに家の中で他人とあつたら最悪だ。

「俺が幸卓に言った電差に乗る時間までもう少しか」

よし、見送りに行くか、ここから走っていけばけっ今日ちょうどいい時間だろう。

「よつす、楽しんでこいよ」

駅まで走っていき待つこと数分幸卓が来た。

刹那は俺がつく前に既に駅にいた。

「見送るかよ」

「ま、暇だからな、じゃ、もうすぐ電車の時間だ、じゃ、またなー」
見送りを済ませ俺は手を振りながら適当な方向へと歩いていく。

「さて、どうやって時間をつぶすか、今はまだ朝早い時間、となると・・・学校に真宗して屋上でボーツとしてるか」

俺は進行方向を変え学校へと歩き出す。

「なにが悲しくて休日にも学校に行くのやら」

俺は学校へと侵入し屋上に寝転ぶ。

しばらくすると部活で学校に来た学生たちの声が聞こえ始めた。

さまざまな声や音が混じり合った子守唄を聞きながら俺はまた寝むり始める。

次に目を覚ましたのはもう暗くなり始めた夕暮れ時間帯だった。

「寝すぎたな、疲れてんのかな。とといつまでもここにいると風邪をひきかねんし、帰るとするか」

俺は学校の敷地外から出て自宅のほうへと歩き出す。

「おっと、そうだった。今日は日曜だったな、家には帰れんし夕飯

はどっかで食ってくか」

俺は俺が寝ている間に来ていたメール全てに返信し今日泊まってもいいかと聞く。

田中から最も早く許可をくれるメールが来たので田中の家に泊まることにした。

少し早い夕飯を食った後に俺は何となく駅のほうをぶらぶらした。

「お、久遠か？まさか見送りに次いで迎えまでしに来たのか？」

そんなつもりはなかったのだが偶然にも幸卓たちとあってしまった。二人のその手は結ばれていて見ているのが辛かった。

「まあ、そんなところだ」

俺は心の中を暗い何かが横切ったがそんなことを微塵もださずにその場しのぎで嘘を言う。

「途中までお前らと一緒に言っていていいか？それともお邪魔虫は退散したほうがいいかい？」

俺は顔にいつも通りの笑顔をはりつけながら刹那に聞く。

「構わんぞ」

刹那の代わりに幸卓が答えた、だからお前はもつと空気を読めと。

その後は俺も混ざりあいながら二人がどこまで言っただのかをそれとなく探りだしながら家のほうへと歩いて言った。

田中の家は実は近所ではないが方向は同じだ。

「じゃあ、二人は普通に遊んで昼飯食べただけかよ」

俺はほんの少しの安堵とまだしばらくこの状況を応援し続けなくていけないかという暗い気持ちになる。

俺たちは車通りの多い交差点を信号待ちしている。俺達のほかには信号待ちをしている人はいない。

歩行者用信号が青になり俺達よりもはやく刹那が左右を確認せずに道路に飛び出す。

その時、俺の視界のにトラックが横切った。信号は赤なのに止まる気配がなく、暴走している。このまま進めば刹那を轢いてしまう。刹那は俺達のほうを向く。どうやらトラックには気づいていないようだ。

「早く行こうよー」

今の自分の状況も気づかずののんきに俺たちを呼ぶ。幸卓もトラックがしかづいていることに気づく。

――だから俺は

6 話（後書き）

マジで読んでくださった方々ごめんなさい

i f t h e w o r l d b a t e n d 1) n o t p o s s i b l e

不謹慎だと思う、ゴメン。だけどこれはこれを書き始める前から書いてみたかったことなんだ。b a d e n d を
微鬱注意？ 鬱展開とか書けないな。

if the world batend1 } not possible

俺は動くことができなかった。俺だけではなく、幸卓も動けなかった。

やけにトラックの動きがスローに見える。今なら、今から動きだしても刹那を助け出せる、そう思えるほどに全ての者がスローにそしてクリアに見えた。

だけど体は動かない、いや、動かせなかった。

なんで動かせないんだ？そんな疑問も浮かばなかった。そんなことを思い浮かべる余裕すらなかった。けども体は動かない。刹那を助けたために足を道路に踏み出して手、を前に刹那をつき飛ばせばいい。

それでも俺の脳はその方法を思いつくことができずにいや、仮に思いついたとしても体が動かなかった。体は地面に縫い付けられたように動かせなかった。

そして全てはスローのままにトラックは刹那に接触し、刹那は吹き飛ばされた。

その瞬間に視界はすべて元に戻った。

グシャッ！

文字通り地面に何かがつき落とされた音がした、刹那の体だ。トラックに撥ねられた刹那の体がコンクリートで覆われた道路にたたきつけられたのだ。

刹那の体からが夥しいほどの血が流れだしてきた。幸卓は今になって動き出し、刹那に駆け寄る。

幸卓は刹那の体から流れる夥しい量の血によって汚れることもかまわず抱きつき、声をかけ続ける。

俺はというとその視界に移り、脳が認識した現実をやけに冷静に認識していた。

想い人が死んだ。なのに俺の感情は動かなかった。

俺は携帯電話を取り出し、病院へと電話をかける

「もしもし、今、友人が交通事故見巻き込まれてしまったんです、急いできてください。場所は――」

そして再び支援を刹那のほうへと戻す。刹那を引いたトラックは既にはるか遠くへと走り去っていった。

交通事故に会った、その非日常の現実には周りにも影響を与え、周囲はざわめいている。

「刹那！大丈夫か！？」

幸卓が必死になって刹那に声をかけている。だけでも刹那からの返事は一向に帰ってこない。

よく思おうとして気絶している、悪く言えば既に手遅れ。痛みに嘆くうめき声すら聞こえてこない。俺はもはや後者のほうが確率が高いと頭の中で思ってしまった。

（これが幸卓と俺んの違いかな？）

こんな状況で俺は自分を自重する。まだ生きている、刹那は助かるんだ。そう思っている幸卓と、助からないだろうな。と簡単に諦めてしまう俺。

だから俺は血を流し続けている刹那には近寄らない。

より一層に刹那の死を自分の中で確定的にしてしまっただけだから。

俺が電話してから10分くらいしてからだろうか、救急車が到着した。

「俺も、ついていきます」

幸卓は涙と血で汚れた顔で救急車に乗り込んだ。俺はそれに乗らなかった。

「幸卓は先に行ってくれ、俺は歩いていくから」

俺は抑揚のない声で幸卓にそう言い、救急車は去っていった。

俺は現場にいる警察官の人に話しかける。

「すみません、少しいいですか？今さっき会った交通事故のことなんですけど」

「君は、現場にいた子だったかい？何か覚えていることはないか？」

「はい、あのトラックのナンバーをしっかりと見ました。ナンバーは――」

「――！？そうか、分かったありがとう、すぐに手配するよ。君はもう帰りなさい。もし辛いようだったら家まで送ろう。」

「いえ、大丈夫です。これから病院へ行きますから。」

俺は警察官に刹那を引いたトラックのナンバーを告げ、病院の方向へと歩き出す。

刹那が魅かれる直前の全てがスローに見えた瞬間に確認しておいたのだ。助けだすという行為は思い浮かばずにすぐに車のナンバーを覚える。そんな行為が勝手に行われていた。

ひょっとして刹那を助けだすなんてできない。そう思っていたのだろうか？だからすぐに犯人を捕まえるために、そのための行動を起したとでも言うのだろうか？

幸卓ならばそんなことはせずにきつと自分の命も顧みずに刹那を助けに言っただろう。きつとあまりに急なことで幸卓も体が動かなかった。そうなのだろう。

いや、幸卓にとっては本当に一瞬の出来事だったのかもしれない。俺には数十秒のように思えた出来事だが実際にはそう何秒もたつてはいない。運動部にも所属していない幸卓では立ち直り反応しきれなかったのかもしれない。

手術室前にたどり着き、そこで部屋の前にある長椅子に幸卓と刹那の母親が座っていた。

「お久しぶりです」

「あら、永夜君？大きくなったわね。こんなときじゃなければもっ

とよかったのにね」

そういつて刹那の母親はつらそうにほほ笑む。

「幸卓、医者なんて言っていた？」

この質問を被害者の親に尋ねるのは酷だろうと俺は幸卓に尋ねる。

「最善は尽くします、だってさ。けれども最悪の場合も覚悟しておいてくださいって」

幸卓は刹那の母親に氣遣ってか俺の耳元で俺にしか聞こえない声で教えてくれた。

もちろん刹那の母親も聞いているだろうけどまた聞かせるのは酷だろうと判断したのだろう。

俺は手術室前の長椅子に座り、何もしゃべらずに刹那が生きることを祈る。

俺がついてから二十分くらいしてから刹那の父親も来た。

だいぶ息切れをしていて本当に急いできたのがよくわかる。

「刹那は！？刹那は無事何か！？！？」

刹那の父親は大きい声で祈るような声で叫ぶように尋ねる。

「静かにしてください、今刹那は壁の向こうで戦っているんです。俺達は静かに待ちましょう」

俺は剣幕な表情で叫んだ刹那の父親にそう諭す。

幸卓も刹那の母親も刹那の父親と同じ気持ちなのだろう。止めようとはしていなかった。ただ下を向いていてばかりだった。

本当は助からないだろうなと勝手に決め付けている。あの現場を見ればそう思ってしまったも仕方ないだろう。

だけどそれを愛娘が失ってしまうかもしれないという親の前で言うわけがない。だから俺は思ってもいない希望的観測に似たようなことをいつて刹那の父親を諭していく。

羨ましいな。そんな嫉妬も浮かぶけど、すぐにあの他人の顔が浮かび打ち消された。

どれくらいの時間がたっただろうか？今の時刻を見るために俺は携帯を開く。

メール着信件数三件

その三件、そのすべてが田中からだった。

内容はいつ着くのか？というもののばかりだった。

俺はそのメールに今日はいけなくなった。そう短い一文だけで返す。返信はすぐに来た。

外が少し騒がしいけどなんかあったのか？

そう聞かれたので俺は あった とだけ返す。

そのメールを送ってすぐにまた返信が来た。

そうか、訳は聞かんが巻き込まれたんだな。それなら仕方ないな、じゃな。

俺はそのメールを見て返信を返さずに携帯をポケットにしまう。

そうしてまたしばらく辺りには静寂だけが残り皆が祈るように刹那の無事を願う。

俺がここについて四時間ぐらいたった時だろうか？

手術室のランプが消え、扉が開いた。

医者の顔色はあまり良くない、そして静かに首を横に振った。

医者その行動に刹那の父親は医者に掴みかかり刹那の母親は泣き崩れる。幸卓もひざから崩れ落ちていた。

「落ち着いてください！」

俺は医者に掴みかかった刹那の父親をすぐに止めかかった。

「落ち着いていられるか！！娘が生まれてからのこの十数年間大切に育ててきた娘を失って、失って」

そこまで言って刹那の父親も医者にも掴みかかった手を離し床に崩れ落ちた。

「ありがとうございます、きっと先生は最後の最後まであきらめなかったでしょう。それだけでも俺は、感謝いたします」

俺は医者にそう告げる。

「大切な娘さんを救ってあげられずに申し訳ない」

医者は泣き崩れている刹那の両親にそう言っ頭を下げた。

「いえ、主人が掴みかかってしまい申し訳ありませんでした、お医者様が悪くないことは分かっているんです、けれども誰かを恨まずにはいられないんです、主人も私も」

刹那の母親は涙語でそう言った。

「先生、いきなり掴みかかってしまい本当に申し訳ありませんでした。最後に娘の顔を見てもいいでしょうか？」

刹那の父親も感情のない声で医者に謝り、ふらふらとした足取りで手術室の中へとはいって行った。

その後につき刹那の母親も入っていき、刹那の亡骸にすがりついて泣いていた。

「幸卓、お前は行かなくてもいいのか？」

その場で崩れ落ちたままたたずにいる幸卓の俺はそう問いかける。

「ああ、だけどき、俺よりも先にやっぱり親たちだろう」

憔悴しきった声で幸卓はそう返す。

「とりあえず立てよ」

俺は幸卓に手を差し出し、立たせる。

俺もできる限りいつも通りに振舞おうとしているが声に感情がないことが分かる。

「中に入ってやることくらいしたらどうだ？」

俺は幸卓にも刹那の両親のように縋りつけとは言わないが、存分に泣いて来い。そんな思いを込めて言う。

「そつだな」

幸卓はそう言っふらふらとした足取りで手術室へと入っていく。

俺も行こうか？とも思っただが途中で自然と足が止まった。

俺なんかが入ってもいいのだろうか？刹那が生きることを諦めていた俺が。

そんな思いが湧きあがり俺は足を止めて、長椅子に座る。

俺は手術室の中で泣いている3人が出てくるまでただ天井を見ながら思考をぐるぐると繰り返していた。

あの時、なんで体が動かなかったのだろう？あの時俺は刹那を助けることができたんじゃないのか？いや、そもそも俺があの場合に、駅に行かなければ、刹那たちに会わなければこんなことにならなかつたんじゃないのか？

答えの出ない過去の行動についてひたすらに後悔ばかりを募らせる。

「ああ、本当に過去をやり直すことができたらなあ」

俺の呟きは誰に届くこともなく、無慈悲に光を反射する真っ白の壁に吸い込まれていった。

i f t h e w o r l d

b a t e n d 1)

n o t

p o s s i b l e

たぶん次の話はこれの続き。

i f t h e w o r l d b a t e n d 1 } n o t p o s s i b l e

全然鬱展開とか書けない、どうしよう。何のためのb a d e n d だよ。

自己満足のためですね、すいません。

if the world batend1 } not possible

刹那が死んでから一週間、あれから学校では騒ぎになったけど、俺と幸卓はそれに対していい気がしなかった。

もちろん刹那の死を悲しんでいる人もいるしそれに対しては刹那の人望が知れて、刹那のために泣いてくれる人がいるということを知ってそう言う意味では嬉しい。

こんな喜びは知りたくなかった。友人のために泣いてくれる人がいる、そのことが少しでも嬉しく感じる俺自身が嫌になる。

人の死を喜んでいるわけじゃない、この涙で少しでも刹那が浮かばれると願う。

「永夜ー、今日遊びに行かねえ？最近お前元気ないしさ。」

友人たちは俺を気遣って遊びに声をかけてくれる。暗くなってしまいがちな時だから俺は無理やり笑顔を作る。

「ああ、ありがとな」

笑顔を作ることには慣れている、いつも学校でやっていることだ。

ただ自分を隠す範囲が増えただけ。

笑顔を張り付け俺は友人たちと会話をする。

そうそう、例の転校生だがクラスみんなが努めて刹那の話題を出さずに明るく接している。転校生の席は空いた刹那の席。

幸卓はその席をよく見つめている。転校生 美晴^{ミハル} 涼香^{スズカ}ではなく過去にその席に座っていた宮上刹那を。

幸卓と刹那は恋人同士ではないけど小さいところからの幼馴染、そのシヨックは俺の比ではないだろう。

俺は刹那のことが好きだったけど、諦めていた、どこかで諦めきれない気持ちもあったがその気持ちは封印していた。

だから俺は今回の事故に対してシヨックだが、自分を偽ることがで

きる。だから俺はすぐに笑顔を張り付けられた。

「幸卓、お前も一緒に遊びに行かないか？」

俺は幸卓に話しかける。返事は帰ってくることは来るが一言二言で終わってしまう。

「いや、俺はいい」

「そんなこと言わずに行ってみようぜ、」

俺は今回は珍しく食い下がってみる。何故そうしたのかは分からない。

「なあ、久遠今日ちよつと放課後いいか？話がしたい。」

俺が食い下がると刹那が交通事故に会ってから初めて幸卓から話があったと言ってきた。だけどその声には感情が乗っていなかった。

俺はそのことに気づかないふりをした。

「時間はかかりそうか？」

俺も声を少し低くして聞き返す。

「そう、かもな」

「分かった」

俺はそう返事をして俺を遊びに誘ってくれたやつらのところへと移動する。

「すまん、今日ちよつといけなくなるかもしれん」

俺はいつも通りの笑顔を張り付け、いけなくなるかもしれないことを告げる。

俺と幸卓の会話は聞こえてはいなかっただろうが見ていたのか、まあ、仕方ないなという風に了承してくれた。

時間がたち放課後、俺と幸卓は屋上にいた。

「なあ、久遠、なんでお前はそんなに笑っていられるんだ？」

屋上に俺と幸卓の二人きりと確認するやすぐに幸卓は俺にそう聞い

てきた。

「・・・」

俺は何も答えなかった、答えることができなかった。

「お前さ、病院でもやけに落ち着いていたよな、いや、刹那がトラ
ックにひかれたあの時もずっと！！！！」

「・・・」

俺は幸卓から視線をそらし、自分の足元を見つめる。

「お前はさ、刹那のこと嫌いだったのか？」

「そんなわけないだろ！！」

幸卓の悲痛な問いに俺はつい語尾を荒げて返してしまう。

「そう、そうだよな。」

幸卓は自分自身を納得させるように何度も頭の中で俺の言葉を反芻
させているんだろう。少しの間沈黙が流れた。

「なあ、幸卓、知ってるたか？刹那がお前のこと好きだったって？」
なんでこの言葉が出たのかは分からない。刹那が死んでしまったこ
とによって気持ちを隠す必要がなくなっただけかもしれない。

「え？」

「俺はさ、ずっと昔から」

「じゃあなんで！！」

そんなに笑っていられるんだ。そう言おうとした幸卓の言葉を聞か
ずに俺は言葉を続ける。

「だけどさ、その時にはとくに刹那はお前のことを見ていたんだ
よ、だから俺は諦めたよ。相手はお前なんだ勝てるわけがないって
な。」

俺は自分を自重するようにクックククと嘲る。

「もちろん、その前に少しは努力してみたさ、だけど結局は徒労に
終わった。告白なんてできるわけがない、断られるのは確実なんだ、
今まで築いてきて友情すら壊れて話すことすらなくなるよりはマシ
さー！！」

「・・・」

今度は俺が黙る番だと言うかのように幸卓からは返事がない。

「知っていたか？俺は刹那からお前に対しての相談をよく受けていたってことに、笑っちゃうよな。自分が好きなやつを応援しなきゃいけないなんて。しかもそれが俺の親友と来たもんだ。ホントに辛かったよ」

「なんでお前は自分の気持ちから逃げたんだよ！！」

幸卓が俺の話を聞いていきなりそう叫んだ。

「逃げる？ふざけんな。逃げるしかできなかったんだよ！！刹那に告白しようとは何度も思ったださ。けどあいつはお前しか見てなかったんだよ！わざわざ断られる事を知っていて玉碎しろと？、自分の首を絞めに行けとでもいいいたいのか？」

刹那が俺の告白を了承してくれるなんてことはあり得ない、それが分かってしまっていた。刹那を見続けていたからこそそれが分かり切ってしまった。

「だから俺に自分の気持ちを隠して刹那の恋を応援していた、刹那の幸せそうな顔を見るために嬉しくなると同時にお前に嫉妬していたよ！なんで俺じゃないんだって！！」

今さらながら今の俺は俺らしくないとも思ったが俺は止める術を知らなかった。普段自分を偽っていたから堰を破った感情の波を止める術を知らなかった。

「俺がどれだけお前が刹那の気持ちに気づいてくれたらと思ったと思う。お前と刹那がつきあってくれれば俺のこの気持ちも収まると思っていた。けどお前は刹那の気持ちに気づいてくれなかった。

気づいてくれるように俺色々手をまわした。今回の遊園地のチケットだって刹那が一步踏み出せるように応援するために渡した！！それで俺がどれだけ後悔したと思う？もし渡していなければ刹那は交通事故に会うこともなく今も生きていた、何度も何度も後悔したさ！！！！」

「・・・スマン」

幸卓の謝る声が聞こえてハッと我に帰る。

（俺は何を言っていたんだ？俺はただ勝手に諦めただけ、幸卓は関係ない。）

我に帰ったあとで俺は先ほどゆき卓に言ってしまった言葉を頭の中で繰り返す。

（本当に俺らしくない、そう分かっていながらも続けるなんて本当に・・・）

自分自身が嫌になってくる、もし、俺の存在意義が本当に脇役だとしたら、俺は主人公の親友というポジションは失格だろう。迷っている主人公に助言を、主人公の態度に喝を入れることはあっても自分自身のことで八つ当たりする。脇役の、主人公の理解者キャラとしての意義を失った。

（俺はこのまま幸卓と交友を続けてもいいのだろうか？親友としていてもいいのだろうか？）

俺は急速に冷えた頭で思考を繰り返す。

そして無言のまま俺は屋上から後者の中へと入っていった。

この時の俺には自分の役割だとかそんなことよりもただこの気まずい空間を抜け出したいという思いしかなかった。結局俺は親友から、自分の想いから全て抜け出した。

その後俺はどうなったかって？

結局その後は、幸卓とは会話することはなかったよ。学校でもその中の教室でも街中で会ったときだってただ気まずそうに俺が避けた。幸卓も何か言いたそうだったけどさ、あいつの周りにいるやつら、ニアちゃん、麗華、涼香がいたからかわからないけどな。

むしろその3人が俺に話しかけさせないようにしている節もあった、ニアちゃんも刹那の死には相当ショックだったらしい、その後幸卓と俺に何かあったのを感じ取っていたんだろうな。

結局関わらせないようにするって方向でニアちゃんも動いたんだろう。まあ、その頃は俺が一方的に避けてたしそうなるのも仕方ないな。

結局幸卓はその3人と時間に癒やされて言って今ではちゃんと乗り越えているようだ、刹那という幼馴染を目の前で失ったショックから。

俺はというと相変わらず仮面をかぶっているよ、自分でも乗り越えたのか乗り越えていないのか自分がわからないくらいに。

そんな俺の将来なんて決まっているだろう、ただ平凡に生きて平凡に死ぬ。まあ、結婚はしなかったけどそれなりに人に囲まれて過ごした。

友人たちとバカやったり同僚と酒を飲んだりでそれなりに楽しい人生だった。

ただまあ、

「本気で、生きてなかったんだな」

この一言が俺の人生で最後に残した言葉だ。後悔はないけど、強いて言うなら過去をやりなおしたい。そうすれば俺も、本気で生きることができたんだろうか・・・

i f t h e w o r l d b a t e n d 1 } n o t p o s s i b l e

これ書いててこんな話し書いてみたいなのがいふかんだよ！
！！どうせ何番煎じかもわからないようなネタだろうけどな！！！！

if the world hadn't been possible to move

そして時はさかのぼる、うそです、事故のところからのやり直しです。

ただバットエンド書いていただけです。

if the world badent2, possible to move

自然と体が動いていた、幸卓は動いていない、いや、動けないのだらう。突然の出来事のショックから立ち直っていないのだらう。

俺を含めて、全てのものがスローに見えた。ゆっくりにしかならない、自分の体に苛立つ。

ハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤク
ハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤク
ハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤク

いくらそう念じてもスピードが突然加速するわけでもない。

「ただ、それでも間に合う、」刹那は「助けだせる、思いつき加
速をつけて手を伸ばして、刹那をつき飛ばせばいい。」

俺の脚は自然と加速し、大きく跳んでいた。そして俺は刹那へ向けて思いっきり手を伸ばす。

――間に合え間に合え間に合え間に合え間に合え間に合え
え間に合え間に合え間に合え間に合え間に合え

時がゆっくりと流れる世界の中頭だけがいつも通りの速度で動く、
 だけどそれも今は意味はない、たった一つの悲鳴にも似た願いの言
 葉を繰り返すだけだ。

刹那とトラックの距離はおおよそ3メートル、刹那は足がすくんで動かないのか、動こうとしない。

俺と刹那の距離はもう1メートルもない、十分に間に合う、助ける

――間に合え間に合え間に合え間に合えマニアエマニア
エマニアエマニアエマニアエマニアエマニアエマニアエ

俺の手は刹那に届き、横から訪れた衝撃のまま刹那は淵飛ばされ、トラックの車線上から外れる。

そして、次の瞬間に訪れるいままで生きてきたなかで最も激しいと予測される衝撃に心だけは身構えておく。

心が衝撃に構えたと同時に衝撃が訪れ、吹っ飛ばされる。

襲ってきた衝撃に肺の中の空気が全て押し出され、俺自身も言葉にならない悲鳴を上げる。

体は動かせず、こうして考え事ができるだけでも奇跡だと思うことにした。

ただ落下時の衝撃に心だけ身構えるしかできない。
やけに落下速度がスローに見える。

そして今までの記憶が再生されていく。

俺の生みの親が喧嘩しているところ、母親が家を出て行ったところ、それ以来父さんともまともにあつてすらないこと。

そして幸卓たちと出会った思い出、刹那に初恋した時の思い出、

「死にたくないなあ」

声にはならなかったけど、俺はそう呟いていた。

グシャッ！！

その音が聞こえた瞬間に俺は意識は暗転した。

「ここは？」

俺は真っ白い部屋で目を覚ました。

「あれ？俺は誰だ？」

状況を整理しようと真っ先に何かを思い出そうとして、最初の時点ですまづいた。

俺は誰だ？その疑問に何も答えることはできない、何も思い出せない。

真っ白な部屋に俺一人きり、包帯だらけの体を見て、ああ何かあったんだなということだけは理解できた。

俺はまず立ち上がろうと腕を着こうとして、左腕が動かないことに気付いた。

何かで固定されている。そして動かそうとするとものすごい痛みが

走った。

「ツツ!？」

俺はしばらくその痛みにも大続けた

左腕が動かせないとわかると次は右腕を動かそうとしたが、全く動かせなかった。

いや、動かせないだけならばよかったが感覚がなかった。右腕はあるのに感覚が一切ない？

何故？そんな疑問が浮かんでくるが答える術は俺にはない。

俺は動けないまま、しばらく時を過ごす。

・・・どれくらい時間がたっただろう、部屋には時計はなく、時間を知ることができない。

俺はただ思考だけを繰り返し、時間をつぶす。

ガララッ

そうしていると突然扉が開いた。

真っ白い白衣を着てた女の人だ

誰？そう思う間もなく、白衣を着た人は慌てた様子でまた出て行った。

何しに来たのだろうか？なにやら外が騒がしくなったがおれがなにかしたのだろうか、俺を見たから外が騒がしくなったが。

また少しの時間がたつと、再び真っ白い服を着た人が入ってきた。

今度は一人ではなく、男女両方がいて複数人だ。

「ここはどこですか？それと俺は誰ですか？」

俺がそう尋ねると白衣の男は優しくそんな笑みを浮かべながら返してきた。

「ここは病院だよ、君の名前は久遠時永夜だよ」

後ろで白衣を着ている女の人ひそひそ話をしている。

「君は名前を尋ねてきたけど他に何か分からないことはあるかい？」

「全部です、なんで俺がここにいるのかも全て」

「そうか、言い方が悪かったかな。何か思い出せることはあるかい
なんでもかまわない。」

「いえ・・・なにも」

「そうか、何か僕に聞きたいことはあるかい？答えられる範囲でだ
つたら教えてあげるよ」

白衣の男はいまだに笑顔を張り付けながら俺を見つめてくる。

「俺はなんでここにいますか？」

「それは・・・」

そういうと白衣の男は答えずれらそんな顔をして言葉を濁す

「なんでですか？」

「君は交通事故に会ったんだよ、その影響で今は一時的に頭が混乱
しているんだと思う」

もう一度聞くと、白衣の男は俺の反応をうかがうように答えた。

交通事故に会った？俺の記憶にはそんなことはない。が否定する材
料は少ない、まず動かないからだ。が何かがあったことを示している
のだから。

「記憶はたぶん時間とともに戻っていくと思う。ん？ああ足と腕の
ことかい？」

白衣の男の話を聞いて俺は次に自分の手足に視線を向けた。

「今は起きたばかりでいろいろ混乱しているだろうから落ち付いて
きたら話しよ、覚悟だけは決めておいてね、そうそう困ったことが
あったらすぐにベッドの横についているボタンを押してくれば駆
けつけるよ」

そう言つて白衣の男が出ていき、後に続いて女の人たちも出て行っ
た。

「・・・動かせないん、だよな」

俺は自分の両腕を見つめる。片方は完全に感覚がなく、もう片方は
動かす時に激痛が走る。足は両方が感覚すらない。

「どうしろってんだよ」

俺は静かにそう呟き、目をつぶった。

暗い闇の中、不思議な光景を見た。

俺が見知らぬ少女を助けようと道路に飛び出した夢だった。

俺はこの少女を知らないはずなのにどこか懐かしく感じた、とても愛おしく感じた、それと同時に酷く心の中が空虚になるのも分かった。

俺はこの少女を知っている？俺はそれに対して確信めいた答えを持つて心の中で頷いた。

・・・だけど名前が思い出せない、誰だ？この少女はダレダ？

俺は少女のことを思い出そうとするが、記憶を検索しようとするれば靄がかかったように急に見えなくなる。無理に靄を進もうとすれば今度は頭に激痛が走った。

イタイ、イタイ、イタイ、イタイイタイイタイイタイイタイ

俺は痛みに負けて思い出すことを中断した。

「いたいな・・・」

俺は名前も思い出せないの少女のことを想い、心が痛くなった。自然と涙も出てくる。

思い出せるのはおそらく俺がその少女を助けようとして車に轢かれたこと・・・もし夢で見たことが本当に怒ったことなのだとしたら、その少女は俺が命をかけてまで助けたかった大切な人なのだろう。だけど今の俺には思い出せない。

「空っぽだな・・・」

俺は自然とそうこぼした。

窓をみると夕焼けが差し込んでいた。気づいていなかったが時間はもう夕方のようなのだ。いや、最初から時間など気にしていなかったからこの言い方は間違いかもしれない。

窓の外を見ていると、本当に自分が一人ぼっちな気がしてきた。

清潔な真っ白い部屋が夕暮れのオレンジ色に染まる。

オレンジに包まれた世界に俺はただ一人取り残されたような気がしてくる。

記憶もないし、体も満足に動かせない。

こんな俺を、誰が必要としてくれるだろうか？

そんな疑問がわきあがった。

i f t h e w o r l d b a d e n t 2 } p o s s i b l e t o m o v

仲鈍の逃亡宣言出しておきますね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266r/>

ジショウ

2011年4月24日17時45分発行